

釧路市教育委員会 令和元年第20回10月定例会会議録

1 日時：令和元年10月23日（水）10時00分から11時30分まで

2 会場：釧路市教育委員会室

3 出席者

岡部義孝教育長

（教育委員）

山口隆委員、松尾千穂委員、種村俊仁委員、小出美貴子委員

（事務局）

高玉学校教育部長、川畑生涯学習部長、大山教育指導参事、
北澤学校教育部次長、江縁学校教育部次長、藤岡総務課長、
小野施設計画主幹、松本総括指導主事、外崎青少年育成センター所長、
森教育調整主幹、山口給食担当主幹、久保北陽高等学校事務長、
工藤生涯学習部次長、澤口生涯学習課長、永井美術館長、
佐藤博物館長、古賀動物園長、牧野阿寒生涯学習課長、
伏見音別生涯学習課長

4 議事録署名人 松尾委員、種村委員

5 傍聴人数 0人

6 提出案件

【公開案件】

報告事項

（1）台北市立動物園交流事業について

（2）学校の現状について

【公開案件】 報告事項

(1) 台北市立動物園交流事業について

(古賀動物園長)

台北市立動物園で実施されたタンチョウ（ビックとキカ）新展示場のオープニングセレモニーと天然マリモ貸与式には、招待を受けた釧路市から市長、教育長をはじめ、釧路市議会など21名が出席した。台湾側からは教育局副局長、動物園長ほか関係者と多くの市民が参列する中行われた。

式典では、蝦名市長からタンチョウ新展示場オープンに対し祝意が表されたところであり、台北市立動物園に釧路市の宝であるタンチョウと天然マリモが貸与されたことで、釧路市と台湾の信頼関係が更に深まり、さまざまな交流が行われることに期待が寄せられたところである。式典の会場には釧路市の観光ブースが用意され、釧路市の自然や観光地を紹介した写真やポスターの掲示、博物館、動物園など釧路市内5施設に入場できるフリーパスの配布なども行われた。

また、教育長及びマリモ研究室は当日午後から、一昨年、マリモ発見命名120周年記念事業が行われた国立台湾博物館を訪問し、あらためてお礼のご挨拶をするとともに、マリモを通じた学术交流事業について意見交換を行った。この度の事業によって、多くの台湾の皆様が釧路市の魅力を知っていただけるものと考えており、相互の信頼の深化が図られたものと考えている。

(岡部教育長)

ビックとキカに新しいケージが作られ、大きさ的には鶴公園に近いぐらいの広さがある。サーモスタットだと思うが、気温が上がった時に自動で蒸気が出てきて、ケージ内の気温を下げるといった東京オリンピックの熱中症対策のようなことも施されていて、台湾におけるタンチョウの位置づけを改めて感じたところである。マリモについても、来園者が多く、その日は1日で2万人の入園者だったそうである。国の特別天然記念物タンチョウとマリモが同時に展示されるということは、今後のインバウンド、台湾人観光客の誘客についても、功を奏するのではないかと思った。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

釧路から台湾にこういったものを提供して、釧路と台湾との交流を今後、積極的にやっていくというねらいは良く分かるが、台湾の視点に立って考えると、この交流は人的交流、観光客の行き来も含めて、双方向であってほしいという思いは、台湾の方にはあるのではないかと思う。台湾と釧路との交流を今後、更に発展的に進めていくためには、こちらから向こうに出かけていくという仕掛けも積極的に考えていかなければならないと思う。例えば、一般市民を対象に「台北動物園でビックとキカに会いましょう！ツアー」というようなものを

立ち上げて企画してみても良いのではないかと思う。これまでは市長や教育長、動物園関係者と台北との交流など、人が限定されている気がするので、一般化を図っていただければと思う。

(岡部教育長)

かつてトランスアジアという航空会社が一時、週に一往復だが定期便を飛ばしていた時期がある。その時に課題だったのが、台湾から釧路に来る人は常に多いが、こちらから台湾を訪問する客の確保に苦労していたという経過があった。今のお話については、観光サイドとも共有しながら、進めていきたいと思う。

【公開案件】報告事項

(2) 学校の現状について

(大山教育指導参事)

初めに、9月定例市議会の総務文教常任委員会と決算審査特別委員会で、学校教育部に關する質問について、どのように回答したかを教育委員会の方針も含めて、校長先生方に報告した。特に「中学校の授業改善を進めるように」という内容であったことを校長会で伝えている。また、与党、野党関係なく市民の総意として中学校に期待していることも併せて伝えている。

次に、長期休業中の補充的な学習サポートの夏休みの参加状況について報告する。

4月にも校長先生方に話したが、今年度から目標値、小学校高学年50%、中学校40%の参加率を意識して目指してください、というお願いをしたので、その数値を基にしながら取り組んだ学校が大変多くなっている。また、学習内容も「長期休業中の課題のみ使用した学校」が減ってきており、各学校で学習内容を児童生徒に合わせて工夫して、取組が進められているというように認識している。ただ、参加率については昨年度まで延べの割合で計算していたのを、今回「単純に補充学習に参加した割合」に変更したので、例えば50%の参加とは、学級の半分の子どもが3日の内、1日でも参加していたという、分かり易い数字に変えている。昨年度とは比較にはならないが、例えば昨年度、夏休みでいうと、小学校が42.4%、中学校は24.2%なので、参加率が大幅にアップしている。今後も、「勉強が苦手な子は残りなさい」という罰ゲーム的な発想ではなく、全ての子どもたちが学びの場を、という環境づくりと考えているので、冬休みも同様に校長会で話をする。

次に、「教科書への対応」と「釧路市すくすくメール」について報告する。

「釧路市すくすくメール」については、初めて全ての保護者にメールで教育委員会からの情報を配信したいということで、学校に保護者向けの文書も出している。この反応を見ながら次年度以降、どのような形にしたら良いか考えていきたいと思う。

最後に、特別支援教育考え方について報告する。

東京学芸大学名誉教授の上野先生の「私たちの教え方で学べない子には その子の学び方で教えよう」という言葉があり、これは特別支援の基本的な考え方だが、「学力向上」が話題

になる中で「宿題が多くなりすぎないか」、「ドリル学習が多くなるのではないか」という心配が前回のこの会議でも話があったと聞いているので、改めて、校長先生方に学校経営の中核に特別支援教育の考え方が位置づいているのが当たり前なので、単純に学力、点数イコール宿題、ドリルにはならない。というお話をした。学校経営の中核に特別支援教育を持っていくという話は、12、3年前、特殊教育から特別支援教育に変わった時に、全ての学校に経営の真ん中に特別支援教育を推し進めてほしいというように、当時、教育局からもお願いをしていた経緯もあるので、その頃の校長先生方はきっとお分かりかと思う。その事も含めてお話させていただいた。

◎この報告について、各委員から次のとおり発言あり。

(山口委員)

釧路市すくすくメールの配信について、今まで学校と家庭がメールでの情報発信、やり取りがあったが、教育委員会が直接家庭にアプローチできる方法としては、非常に良い方法だと思う。しかし、配慮してもらいたいのは、教育委員会から直に家庭に通知が来るのは、凄く便利だが、学校を通り越して通知が行くと、学校が知らなかったという事態が起こるので、そうならないよう、教育委員会から家庭にメールで情報配信する時には、タイムラグが起こらないような、学校での認識も配慮しなければならないと思う。

次に特別支援の考え方について、非常にこの言葉は良いと思う。学習活動というのは、教師のやり方に子どもたちが合わせるのではなく、子どもの実態に教師が合わせて、一人ひとり対応できる、そういった学習活動が保証されなくてはならないと思う。それを非常に端的に表現した言葉なので、全ての学校の校長先生、教頭先生、一人ひとりの先生がこの事を認識しながら授業を進めていくという、そういう日が早く来るように願っている。そうすると、必ず釧路の中学校の学力も含めて向上すると思う。

(松本総括指導主事)

すくすくメールについて、家庭への情報提供が主な目的ではあるが、現在、市教委から直接家庭にというラインが現在は存在していない状況なので、学校の持っているメールを介して配信するという事で、協力をお願いしているところである。なので学校に情報を届けて、学校から各家庭に情報を配信いただく、といったプランを進めていくところである。

(種村委員)

長期休業中の補足的な学習サポートについて、中学校の学力低下が話題になっているが、その学力低下に対して、内容的にそれを少しでも上げていこう、という目論見もあつてのサポートなのか。それとも、今までやってきたから、それを踏襲してやっているものなのか。

(大山教育指導参事)

基本的には、学力の下位層の子どもたちに基礎的な事を指導し直すということがメインで、学力向上のために行うものであるが、小学校低学年であれば、そういう子どもたちを呼んで残って勉強しなさい、と言っても喜んで残ってくれるが、小学校高学年から中学生に同じこ

とをやろうとした時、教師と子どもとの人間関係が出来ていれば問題ないが、そうではない状況になっていると、その関係を作ることが重要になる。まず学校として学習に向かう、勉強をするということは大切なんだよ、という雰囲気为学校全体の中で出て初めて、関係性ができてくるので、昨年度までのような形で無理やり実施するだとか、いわゆる参加率が少なくても、その言い訳が「必要な子どもだけ呼んでいます。」となってくると、話がややこしくなってくる。学校全体として、この補充学習を使って学校全体が学習に向かうように、その雰囲気を作ってほしいということで話をしている。

(種村委員)

特に今年の中学校3年生の学力低下というのは、私自身も非常に感じているところである。おそらく上位層はそれなりに勉強しているが、いわゆる下位層が勉強する習慣がないというか、もともと力がなくて、そのまま行っている、という感じがする。こういった補充的な学習サポートは、それを援助するには非常に良い手段ではないのかと思う。もっと平均点が上がるような方策も是非考えてやっていただければ良いと思う。

(小出委員)

長期休業中の学習サポートについて、毎年中学校の参加率が低いという一因の一つに、部活動と学習サポートの時間が重なっていて、出られないという子も多いという状況があったと思う。参加率が上がったという中で、何か工夫した学校や、事例などはあるのか。

(大山参事)

詳しくは調査していないが、昨年度と比べると、部活をしない日を作って補充学習をやっている、という中学校が増えているのが事実である。

(小出委員)

特別支援学級の考え方について、私も凄くいい言葉だと思った。学校で学習面だけではなく、生活面を指導する時に、先生は正しい方向に導こうと思って指導していると思うが、それが出来ない子がいる時に、出来ないのが悪い、出来るようになりなさい、という指導ではなく、その子に寄り添った指導が全ての小学校、中学校でも全ての先生に広がってくれば、困り感のある子どもたちが、学校に来るのが楽になるのではないかと思う。

(大山教育指導参事)

この言葉は、学校の教育活動の柔軟性と専門性が大事だという二つが示されており、自分は教えたから、あなたたち分からない子どもたちが悪いと、いうのではなく、もっと柔軟にやりなさい、ということと、当然子どもに合わせた指導法も考えなくてはならない専門性と両方の事を言っているので、今回この言葉を引用した。ただ、各校長先生方が学校経営をやられているので、それぞれの言葉を持っていたり、考えがある。校長先生方がそれぞれ持っている言葉で先生方に伝えていると思う。

(松尾委員)

すくすくメールについて、私も近くの中学校からメールを受けているが、とても細かくいろいろな事が記載されており、行事に対しての注意や、台風の時に吹奏楽部の活動があったのだが、それをどうするかという判断の基準など、親にしてみればとてもありがたい事だと

思う。今日やるのか、やらないのか迷っている時、何時に判断してメールしますと、きちんと出してくれていたり、不審者情報が入ってくる時もある。今の時代は、手紙を見なくてもメールは見るという世代の親が多いと思う。その中に、市教委からのいろいろな情報発信があると、そのあたりはしっかり伝わっていくのではないかと思うので、是非よろしく願いしたい。

(山口委員)

何年か前に、夏冬休みに各学校の学習サポートを見せてもらい、非常に良い取組をしていると感じる学校と、改善の余地があると感じた学校があった。その時に、良い学校の実践を情報交換、横の情報交換をもっと密にやって、良いものは真似するというのを定着させたほうが良いのではないか、という話が教育委員会の中でも出たように記憶している。そういった事について、現在どのような状況になっているのか。

(松本総括指導主事)

学習サポートの情報交換の部分については、4月の初めに教務の先生が集まり研修会を行った。その中で学校同士、特に中学校同士、小学校同士という形で、後は学校規模の同じくらいの学校でグループを組んで情報交換する機会を作った。その前に、どういった取組をしているのかアンケートを取り、釧路市の状況ということで、取り組み方を情報提供させていただいた。例えば、部活休業日を決めて、そこに充てるという取組であったり、学力の向上との兼ね合いと考えた時には、夏休みの授業という形で習熟度を作ったり、中学校によっては予備校や大学の講座的のような形で、何日の何時間目は理科の基礎があるよ、というお知らせを配り、生徒が選べるなど、さまざまな取組の交流をすることができたので、そのようなところを少しずつ生かしていきたいという意見が先生方から出ていた。そういったところが改善されていけば良いと感じた。

(松尾委員)

学習サポートと少し違うが、前回の総合教育会議の中で児童館で学習支援ができないかという話があり、モデル児童館になった緑ヶ岡・貝塚ふれあい交流センターで、先日21日に第1回目の学習指導を実施した。当日来ていた子どもたちが全員参加し、ふれあいセンターの1階の地区会館部分の部屋を二会議室貸していただき、そこで勉強させてもらった。母親クラブの方々も7人見守りに来ていただき、子どもたちのサポートをしてもらった。宿題をやっている子が多かったが、ドリルを持ってきている子もいれば、何も持ってこない子もいた。何も持ってきていない子には、宿題が終わったら家庭学習をしようか、と声を掛けて、今勉強している今日の宿題の違う問題や、漢字の書き取りなどをやらせた。中には時間を過ぎても、まだやっている子もいたし、飽きている子もいた。母親クラブのメンバーは、教えられないということは分かっているので、どのように接すれば良いか戸惑っていたが、教えるのではなく、子ども自身がもう一回考えられるように声をかければ良いと助言した。今後、親御さんたちにこの取組をもっと知ってもらえれば、家庭学習用のノートも持たせてくれたりなど、もっと充実した時間を過ごせると思うので、今後、児童館の職員に保護者への周知をしっかりとやってもらいたいと思っている。

次にいつやるかは決まっていないが、できるだけ回数を増やせていけたら良いと思う。子どもたちは順応性があるので、そのような環境になればやるのではないかと思う。他の館の構成員さん達は、うちもやるのだろうか、と不安視している話を聞いた。地域の方々がどれだけお手伝いをしてくれるかという事が一番だと思うが、1回やった感じでは、とても先行きは明るいのではないかと思った。他の館になるとどのようになるのかはわからないが、十分出来ると思う。緑ヶ岡・貝塚ふれあい交流センターは、本当は65人くらいの子どもが在籍するはずだが、毎日全員が来るわけではない。部活、少年団がある子たちは、来なかったり真っ直ぐ帰ってしまう子もいる。21日の活動は、子どもたちにしてみたら、新鮮な時間だったのではないかと思う。この先も続けていきたいと思っているので、学力向上の一貫にどれだけなるかはわからないが、児童館で勉強する習慣をつける事は大事だと思うので、見守りがいなくても、自分たちでやるようになってくれたら、素晴らしいことだと思う。学校ともう少し連携を取れたら良いと思ったので、是非先生方に見に来てほしいと思った。

(山口委員)

対象の地域である清明小学校の校長先生、教頭先生は取組のことを分かっているのか。

(松尾委員)

分かっている。

(岡部教育長)

地域の子どもを地域で育てる、ということの具体例だと思う。教育委員会は直接ではないが、放課後をどうやって使っていくのか、百人一首、けん玉、一輪車に乗るのも良いが、勉強する事もその中の一つの項目にあっても良いのではないかという取組だと思う。

(小出委員)

児童館の学習について、とても良いことだと思っており、子どもは家で一人で勉強するより、誰かがいて、みんなでする方が集中できたりするものだと思う。中学生、高校生も家で一人で勉強するより、図書館に行った方が集中できると言って、わざわざ出かけて行って勉強したりする。先程の児童館でやっている取組のようにやった方が、意外と子どもは楽しく集中して勉強できると思う。新聞に載った時点で、いろいろな人から反応があり、とても良いね。と言った人と、児童館でまで勉強させるの。という反応もあり、否定的な意見も少しあった。そのあたりも、もし他の館で進めるという事になると、児童館の職員、PTAの人も含め、児童館の学習は詰め込みとか、そういう事ではなくて、楽しくできるし必要な事なんだ、という事を分かってもらえるような周知の仕方も必要だと感じた。少なからず児童館での学習に抵抗感持っている人もいると感じている。